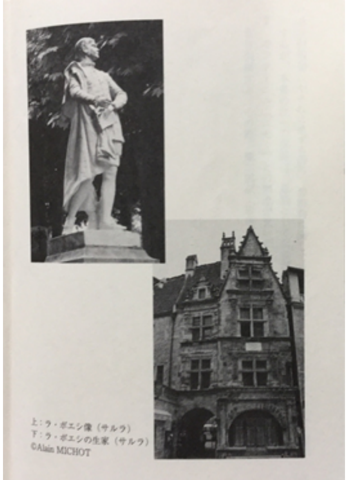
『自発的隷従論』解説

哲学者の西谷修さんが、難解なラ・ボエシの『自発的隷従論』の解説を書いている。この解説により、先に紹介したボエシの論考を考えていきたい。



上：ラ・ボエシ像（サルラ）
下：ラ・ボエシの生家（サルラ）
©Alain MICHOT

この小著の眼目は、圧政が支配者（しばしばただ一人の者）自身のもつ力によってではなく、むしろ支配に自ら服する者たちの加担によって支えられると論じた点にある。強権的な支配や圧政が問われるとき、たいていの場合人は、支配者の側に圧倒的な力を想定し、それによって弱者が受難を強いられると受けとめる。そして力の独占と専横、その圧政を被る犠牲者、言いかえれば加害者と被害者、強者と弱者といった図式があてがわれ、そこに善悪の判断を重ねて「強者＝加害者」の悪を告発する、といった構えができる。

だが著者は、この図式よりも先に、支配秩序に関わる人びとの具体的な相を見る。支配者が一人ではそれほど強力で残忍だとは見えないにもかかわらず、古今東西どこでも「一者の圧政」が広まるのはなぜなのか。獣たちが檻を嫌うように人間の本性はもともと自由を好むものではないのか。それなのに、人びとは隷従を求めるかのように支配に甘んじ、支配されることのうちに自由や歓びを見出しているかのようだ。その不条理の前にラ・ボエシは、なぜ人びとはかくも従容として隷従を選びとり、ときにそれを嬉々として支えさえするのか、と問う。要するにかれは、圧政の正邪を論じるのではなく、そのような支配を可能にしているからくりを「人間の本性」から探ろうとしている。その意味でかれは、政治論者であるよりも人文主義者（ユマニスト）なのである。そしてかれがそこに見出したのは「臆病と呼ばれるにも値せず、それにふさわし卑しい名が見あたらない悪徳」（15 頁）であり、名指されることのなかったその悪徳にかれは「自発的隷従」という名前を与えたのである。支配と被支配、圧政と忍従、この対立図式をかぶせると見えなくなってしまう支配秩序のからくり、それを摑み出し、名づけて見えるようにした、これがラ・ボエシの無類の功績である。

一人の支配者は独力でその支配を維持しているのではない。一者のまわりには何人か追従者がおり、かれらは支配者に気に入られることで圧政に与り、その体制のなかで地位を確保しながら圧政のおこぼれでみずからの利益を得ている。そのためにかれらはすすんで圧政を支える。かれらの下にはまたそれぞれ何人かの隷従者がいて同じように

振る舞い、さらにその下にはまた何人かの------、という具合に、自ら進んで隷従することで圧政から利益を得る者たちの末広がりに拡大する連鎖がある。その連鎖が、脆弱なはずの一者の支配を支えて不動の体制を作り出している。そう見てとって、圧政を支えるその鎖の一つひとつのあり様をラ・ボエシは「自発的隷従」と呼ぶのである。圧政は一者の力によってではなく、この体制のもとで地位を得かつ利益を引き出す無数の追従者たちによってむしろ求められ、そこに身を託す多くの人びとによって支えられている。そしてその底辺には、圧政を被り物心両面で収奪されるばかりの無数の人びとが置かれているということだ。けれどもその人びとでさえ、「パンとサーカス」で慰撫され気を逸らされて、圧政からの解放を求めるよりも気晴らしの娯楽で憂さを忘れ、むしろそれを取り上げられることに怒りを向けて、支配の継続を求める傾向さえあることを、ラ・ボエシは過たず指摘している。

（2015 年 6 月 24 日）